源氏物語大意下巻　餘論

宮曜文庫

或曰源氏物語ハ昔より今ニいたるまで。
ことなるもてはやしもなくして誠ニ名
ハ見はてしらぬ玉宴(レイホウ)にて。淫乱(モロコシ)の
左國史漢(サコクシカン)ハ論(コエ)ずして書ハ中ゟ。まづ
あまたゞ初学ハいかゞと歌(ウタガ)ハしきを
いつゝび。論じあらそひ仏者のかゝるもを
なん。扨のけ城そめ天狗樹神変化(テングノコダマヘンゲ)乃歟(ルイ)。

當業乃ち驗者(ゲンジヤ)共ゑ志つゝ驗(ゲン)ずれるもし。又ハ
佛乃大小乗みちをゝ悟道(ゴダウ)發明(ハツメイ)のちゝ
まづ。考(ミナ)ふるをもて人なれバ。兎ゝ
ゑゝゐるもゝゝるゝゝるゝ
もゐるをバ。笑見(シヤウケン)ゐるゝ及ぶゝゝゝゝ
いゝゝし。喫茶(ケンシヤ)考へ圓拾ゝゝもり

圓通峯下老隠
雄堂祖紘行年八十三歳謹書

○源氏物語を注釋(チウシヤク)する人。湖月抄の後地(ゴヂ)下ふも
彼是と多くて。何るぶい大ゝゝゝゝゝ
ハいゆゝゝゝぶゝゝゝゝ抄もしゝ物語の他
者業式部ハ佛教(ブツケウ)を深くゝゝる人なゝバ。佛
意ふゝゝゝゝ。ゝゝ女ゝゝゝゝ
らんゝゝゝゝ

○誰人の説(セツ)ゝ詞ぶゝゝ
通ぶぶゝゝゝ。

ゑをそへてあるべいぐで無ぜんぽう
佛教の廣大なるを說(トク)ぐ(ヒロ)(ダイ)(セツ)(ミサイ)細(コマカ)なるものをや
○源氏物語の要旨(エウシ)も人(ヒト)ぐ(ヒト)に從(シタガ)ひ機(キ)に應(オウ)じて說(トク)ぐ(セツ)。以(テ)ル機奪(ヲ)機(キ)以(テ)ル毒(ヲ)制(セイ)ル毒(ヲ)の義(ギ)を說(トク)ぐ(コトワザ)。ゆゑ法(ホフ)を說(トク)ぐ(セツ)に法(ホフ)をおしんの意(イ)なきものをや。
法(ホフ)門(モン)も格(カク)外(ゲ)乃(ノ)教(オシヘ)意(イ)をもて賢聖(ケンセイ)の義乃(ノ)格(カク)式(シキ)ぐ(シキ)
等(ナラ)ぐ(ナラ)こと(ビ)諸道(シヨダウ)ぐ(ドウ)もこれあるべし。此物語(モノガタリ)もそ
のごとくなり

○天台智者大師の經(キヤウ)よ注界次第(シヤカイシダイ)といふあり。その
中(ナカ)に同事攝(ドウジセツ)といふ事(コト)あり。源氏物語(ゲンジモノガタリ)の作者(サクシヤ)これ
かるゝ不(フ)ぐ(ヒト)しも源氏(ゲンジ)まん之(ノ)設(マウケ)上
人の叶山(カナヤマ)集字乃(ノ)書(カキ)て登(ノボル)石山寺(イシヤマデラ)といふ文章
にいふ。源氏(ゲンジ)ものがたりを書(カク)ぐ(カク)ことも要(エウ)ぐ(カナメ)ありてなり。勿論(モチロン)
武(ブ)ぐ(ブ)の具(グ)那院(ナヰン)後(ゴ)乃(ノ)許可(キヨカ)を得(エ)ぐ(エ)。一心(イツシン)三觀(サンクワン)乃
旨(ムネ)を悟(サト)ぐ(サト)悟(サト)ぐ(サト)る人(ヒト)も。天台(テンダイ)まあもそ(ビ)人(ヒト)なり。
石山(イシヤマ)の觀音(クワンオン)化身(ケシン)なりなどいふも。あるにて

ふをほろぼさざるべし。歌書といふて石すゑ
木ふき造(ツク)るべし。瑞籬(ズイサウ)を乱(アラ)すべからざるものなるべし。
言(コト)乃歌音い南時式部と婦女子を現じて。色
情(じやう)に溺(おぼ)れ愛欲海度(サイド)のことゝゝべし。経
人々は歌書の義書世(ギやうばん)の物乱(ばん)といふものにて。
○超(すべ)て善薩(ぼさつ)がい。前世ふ物乱といふものにて。
さるゝと身をうくる事を海度(おうしん)のごとし。
ふつゝ。歌書乱ふ三十二意身なり。先

毎密(ミツ)気よ拉(ユウガク)せしゝ。仏書ばかりふ
ふ事ふ人の。歌書ふ
ある法師日歌書
とやふ事よ。
世音い耳をおつ
粗(あら)ま乱(ばん)ふなり。禅(ゼン)録(ロク)
云々考へ
○愛吟法師の源氏物語大意下

源氏を釋(シヤク)せよ。佛書にもまる人もうれい
妙なり。日本紀等皆古書ふるなり。
先づ。傳教弘法(デンゲウコウボフ)の事を
初めとして弘法(ケンゼン)の弟子
なり。天子一條院中宮と東門院(トウモンイン)とて佛ふ
帰依(キエ)あり。其を隨侍(ズイジ)乃至女。佛とも云
ふべき世相を書(カ)くや。時代をとらへ
○契沖阿闍梨(ケイチウアザリ)古学の祖(ソ)とする人もあれど。古今

等乃抔(ナド)も佛をいふことをおほくて。代五紀(ダイゴキ)の
中にや契沖云。人凡(ダイゴン)大権の聖者(シヤウジヤ)ぞとも。
歎(ナゲ)き無常を観(クハン)じたること多しとも
○細流日世界(ニセカイ)あるを思ひ帰本にたゞまり。義
治まりて終(ツヒ)と宣(ノ)へり。此物語乃
大意(タイイ)成(ナル)ことのおほし。道遠院殿帝
本巻をよみあるて奇ふ誰(タレ)うそのまゝおかを
志(こゝろざし)や世(よ)の中(なか)にて帚木乃巻(ははきぎのまき)やを。又

夢浮橋巻の詞にハ、昔よりて誰も知りつゝ同じ
世をいとふ驚かむ夢路なるべし。此清流ども、なほ〳〵
其物語乃作意を悟りがたしとおもふ也。仍留

○此物語ハ権実織兼て教の意をふくむべしとこれ
までの物語とハ雲泥の違ひなり。本朝乃ことハ
いともたえなる儒釈道の深きをもこれ下にあり
こもりてかゝふれりのなり。詞づかひ褒貶共に
あるハ、春秋乃筆誅にも似たるなり。語勢ハ荘子が
ことなる故。自然此事をもいふべし

○物語の始よりまた此源氏時代を隔て
いつれの御時にか人間界の趣にまかせて広し。時
代をいへバ天地に限るべし。荘子に北冥有魚
北ハ陰なるをもつて冥もくらきなり
と出和して出るなり。此物がたりある
所を明らかに悟るが人界の肝要の義なり。秘蔵
宝鑰に弘法大師曰。生れ生れ生れて生の始に暗く
死に死に死にて死の終にくらしと云ふ。深く考へ知るべし

○荘子(サウシ)などは佛書にもまさりぬべき事ども多かれど。ただそのままにては。喫茶(ケンシヤ)の人に胡椒(コテウ)の善悪を云ふ如くにて。なほ孔子の道にかなはざるなり。

○論語(ロンゴ)などや。子路(シロ)が孔子を未知生(ダラヲズレ)なんどいひたるも。実(ノタマ)へば。儒(ジユ)ありてこの世界の外をしらざるなり。

へしも孔子の知りたまふ所にあらず。世(よ)の人の善悪(よしあし)を勧懲(すすめこらし)むるの書(ふみ)なるべし。積善(セキゼン)の余慶(ヨケイ)などいふことも。天台(てんだい)大師(だいし)の作(つく)りたまへる書(ふみ)に一部具(グ)したるなり。経巻(きやうくわん)の功徳(くどく)などを。かくまで書(かき)あらはしたるものなり。経巻(きやうくわん)の功徳(くどく)を書(かき)たるものは。肝要(カンエウ)なきことにて。ものの数(かず)にもあらず。先(まづ)うつくしき経巻(きやうくわん)を。源氏(げんじ)の二書(ふみ)もり。孔子(こうし)の怪力乱神(クワイリヨクランシン)をかたりたまふ

ざるい。光る君のみを乱をぐ為うつむ。或儒者
曰。力なき為乃至城うつ猛るものや。
世後いかりと笑ひ。子不語怪為乱神とつむぐ
しと。神ハんるりこと
○三世乃道理をふて死人こゝろ。魂の流転をふて
ものがたりや。山物がたり
ふるいそ。須磨の巻ハ桐壺帝ハ
氏にのこと。まこと後壺女御の事ある。

源氏を悩ますもの六條御息所の生霊
死霊なり。皆誉式部の文才と融公の亡霊文安に付ていることあり。又
文料と融公の亡霊文安に付ていることあり。又
毎門関の倩女離魂などふも考へ知べし
○世物語ハ善悪邪正さまざまあるものなり。
あるものなりバ。
つゝる。浚車乃誠と称
されど女子もよみやすく。誠ハ志育乃物語

いくさ。論語は孔子の教訓なり佛経は釋迦乃物語なるもそのごとく儒子百家稗史をかくれ。皆物語ずくめにて作りたる文なれ。あまたの語をもまぜ書女訓の如くなれ。されど皆善悪邪正をあらはしてよきをすゝめあしきをいましめ勧懲の業をなすこと物語にまさるものなし。みな人みづから心をおさめ身をおこなふべきこと考ふべし

そうこと哥詞もまじり後成家の続き文は物語ぶんなり。又は物語ぶんにて賞美（しょうび）のこと。又は物語乃ごとくにて賤（すが）しきをもまじへてしるしたるもあり。

○或ものにいはく。物語といふもの儒佛の書に引（ひか）うるごとく類（たぐひ）なき戯作。儒佛の書にはあらず。却（かへ）つて大なる虚ひがごとなり。綵元物語平治物語平家物語などいふれも実録（じつろく）にして物語といふこと絶えてなし。物語といふこと絶えて久

○當れる事を悟り那(サト)なるものゝ多かるに疑ひをさしはさむ事なくおりくでさういふ事のあるを悟り此端(ハシ)をきゝ。過現未(クハゲンミ)三世の理ハ天下皆實理なり。誰(タト)かこれを疑ふべき。今日の現生(ゲンサイ)のまゝバ。昨日も過(クハコ)去なり。明日も未來(ミライ)あるべき。これ皆實理あるべきことぞかし。明日のまゝバ。今日のまゝなり。來年も事ゝ物ゝ皆此理あるべきことぞかし。明三世の理(コト)ハ。皆實の目あるべきなり。今日が

なくバあるべからず。明日あるべきことハ。昨日あるべきことなり。

○源氏物語大意下

忘(トモシビ)れめまバ燈を吹消(フキケ)して。何も見えわかぬ闇(アン)室(シツ)なるべし。

其(カ)ゆゑ善惡(ゼンアク)ともに。後の世あるべきことを知るべし。

身ながら一大事(ダイジ)なることを。しらで思ひくしてしぬ。

○前段(ゼンダン)もいへるごとく。おろかなる迷(サト)ひの眼がなくてハ。

物語も物の事ハ。何(ウタガ)ひ疑(ウタガ)ひ。

も悟(サト)らるゝ事もあるべし。又諸宗ともに
ふ我ら。林野(リンヤ)も閑居(カンキヨ)。多かるにも山居
し。又諸宗ともに悟道(アンドウ)の時既の如
ら我なれど。覚束(オボツカ)なく覚見(クハンケン)を来もぐ覚見を永さん
ん悟(マヅ)の悟るよい法門をよくよく知るべし

悟(サトリ)

○悟り此根元い指(チン)す処(ケ)微笑。三世不可得(フカトクホン)。本来無
一物(イチモツ)。柳緑花紅(リウリクワコウ)と書(カイ)かれ。書(カ)かれ不書(カ)かれ分別
して悟(サト)るべし。却(カヘツ)て害(ガイ)ありと知るべし。
和尚(ヲシヤウ)人(ニン)ごとに参(サン)ぜよ。千百万劫(カフ)も安く通(トウ)ぜず。
和歌も悟り法(ホフ)の門(モン)に入(イ)て後捨(スツ)る事(コト)なり。
根(子ゴロ)来の開山の哥(ウタ)に
いちえんもぐ愛を捨(ステ)ても。和(ワ)をもとめ浮世の
あめ法(サメ)ぬ中いとの
ぐさもてもぐ愛も現(ウツ)れるものなり。法(ホフ)も

弘経(アキラ)をおもわんと思ふべし。世(ヨ)の外(ホカ)を観(クハン)ぜよとは
空(ムナ)しく。悟りに志(ココロザ)を専(モハラ)にすべし。学文(ガクモン)も
まづ。主君(シュクン)をも生家(ショウケ)をも利益(リコン)をも仏道(ブツダウ)をも。不(フ)可(カ)
浮世(ウキヨ)の愛(メ)が覚(サ)むること。垂迹(スイジヤク)仏(ホトケ)の祖師(ソシ)なり
○一如師曰。但(タヾ)見(テ)其迹(ソノアト)莫測(レヒトシ)其本(ソノモト)云々(シカ〳〵)一如(イチニヨ)は法(ホフ)の新
注(チウ)などせられず。言語(ゴンゴ)の徳(トク)なり。心(ココロ)にまかせる我(ワレ)
業(ワザ)のやまひ。迹(アト)と云(イ)ふ字(ジ)をわすれ本(モト)をと
いつもきんもう。和尚(ヲシヤウ)奇特(キドク)といふべし。一首(イツシユ)を云

弘経(アキラ)をおもわんと思ふべし。世(ヨ)の外(ホカ)を観(クハン)ぜよとは
空(ムナ)しく。悟りに志(ココロザ)を専(モハラ)にすべし。学文(ガクモン)も
まづ。主君(シュクン)をも生家(ショウケ)をも利益(リコン)をも仏道(ブツダウ)をも。不(フ)可(カ)
浮世(ウキヨ)の愛(メ)が覚(サ)むること。垂迹(スイジヤク)仏(ホトケ)の祖師(ソシ)なり
○一如師曰。但(タヾ)見(テ)其迹(ソノアト)莫測(レヒトシ)其本(ソノモト)云々(シカ〳〵)一如(イチニヨ)は法(ホフ)の新
注(チウ)などせられず。言語(ゴンゴ)の徳(トク)なり。心(ココロ)にまかせる我(ワレ)
業(ワザ)のやまひ。迹(アト)と云(イ)ふ字(ジ)をわすれ本(モト)をと
いつもきんもう。和尚(ヲシヤウ)奇特(キドク)といふべし。一首(イツシユ)を云

弘経(アキラ)をおもわんと思ふべし。世(ヨ)の外(ホカ)を観(クハン)ぜよとは
空(ムナ)しく。悟りに志(ココロザ)を専(モハラ)にすべし。学文(ガクモン)も
まづ。主君(シュクン)をも生家(ショウケ)をも利益(リコン)をも仏道(ブツダウ)をも。不(フ)可(カ)
浮世(ウキヨ)の愛(メ)が覚(サ)むること。垂迹(スイジヤク)仏(ホトケ)の祖師(ソシ)なり
○一如師曰。但(タヾ)見(テ)其迹(ソノアト)莫測(レヒトシ)其本(ソノモト)云々(シカ〳〵)一如(イチニヨ)は法(ホフ)の新
注(チウ)などせられず。言語(ゴンゴ)の徳(トク)なり。心(ココロ)にまかせる我(ワレ)
業(ワザ)のやまひ。迹(アト)と云(イ)ふ字(ジ)をわすれ本(モト)をと
いつもきんもう。和尚(ヲシヤウ)奇特(キドク)といふべし。一首(イツシユ)を云

弘経(アキラ)をおもわんと思ふべし。世(ヨ)の外(ホカ)を観(クハン)ぜよとは
空(ムナ)しく。悟りに志(ココロザ)を専(モハラ)にすべし。学文(ガクモン)も
まづ。主君(シュクン)をも生家(ショウケ)をも利益(リコン)をも仏道(ブツダウ)をも。不(フ)可(カ)
浮世(ウキヨ)の愛(メ)が覚(サ)むること。垂迹(スイジヤク)仏(ホトケ)の祖師(ソシ)なり
○一如師曰。但(タヾ)見(テ)其迹(ソノアト)莫測(レヒトシ)其本(ソノモト)云々(シカ〳〵)一如(イチニヨ)は法(ホフ)の新
注(チウ)などせられず。言語(ゴンゴ)の徳(トク)なり。心(ココロ)にまかせる我(ワレ)
業(ワザ)のやまひ。迹(アト)と云(イ)ふ字(ジ)をわすれ本(モト)をと
いつもきんもう。和尚(ヲシヤウ)奇特(キドク)といふべし。一首(イツシユ)を云

○一切経い唐(タウ)の代ニ五千四十八巻といふ。物語の
多キ中ニの教ハ古ヨリ今ニ至ルまで。蒼狐(キウセツ)のごと
く天台ハ六十巻とも。ハいづれ
ニもとらじ。
○深草ノ元政ハ幼年(エウネン)ヨリ法花経を学ビて
ことに。別して堂巻(ドウクワン)ハ。
ら〳〵文章(ブンシヤウ)世ニ出ル。和歌ハ
中ニ源氏の事ニ
ふ出せり。和歌者源ハ

のごとし。まづ〳〵。和歌も一ノ
和歌集ニ一ノ
ごとし。

○儒家七論ニ小冊(セウサツ)ありて。草山
集ニ
ごとし。
○書家ニ
ごとし。
○源氏物語大意下

天竺の項〳〵むく〳〵と門人城集めく〳〵人〳〵みな
織(シキ)をいく〳〵せ〳〵。海(ナンデ)は赤い魚皮(カハ)をはる。海は我肉(ニク)を
浮〳〵と。海は赤骨子(ホネ)城はる。海も我髄(ズイ)をはる。
はる〳〵山龍を浮〳〵人は二組恵可(エカ)大師もく〳〵組の
う〳〵のこを釋迦(シヤク)をふるやう
ものや。龍までは及ばども。肉るうこを得
るものや
物(モノ)の怪(ケ) 物はだいたいのあやかし(アヤカシ)
あ〳〵ぬなどいつるけもの怪しきあり

○そのもの行もまた付のある病なり。
女はうへ多し。凡(オヨソ)女の性は繆(ユウ)〳〵もろ〳〵
道理ふ〳〵とて。人はうへもろ〳〵。
おしれるものやうやはんぐ〳〵なおん
ぐ〳〵もの〳〵。ふ〳〵。邪神(ジヤシン)が感(カン)じ合てや
まんてふ〳〵べし。強(クウチ)ば狐狸(コリ)の類(タグヒ)につがて〳〵。
狂心(セイシン)中に精神邪神とて。をやしふる
氣のひるが。則(スナハチ)精神邪神ふる。人往(スン)ぬ赤乃内

ましても。日ごろ乳母などの申しし人々を
召(メ)して。経(キヤウ)仏(ブツ)供養(クヨウ)など。龍蛇混雑(リウジヤコンザツ)のごとく。
仏(ほとけ)おこなひ香(かう)焼(た)きつゝ。精神(シヤウジン)乃(すなは)ち佛(ほとけ)を念(ムカ)ずるごとく
なり。佛(ほとけ)の佛國土(ぶつこくど)のごとくおもひつゝ。
ばかり。又悪人(アクニン)を調伏(テウブク)の法(のり)。自(みづか)ら行(おこな)ひ。
なく。ひそかに新羅神(シラギジン)を念(ムカ)ずる為(ため)や。人(ひと)
めよからずとて。奥(おく)に籠(こも)りゐたまへるを。
験者(ゲンジヤ)の法力(ほふりき)ありて。付物(つきもの)を
乳母(めのと)などに移(うつ)りかゝるもいとうるさし。
きつねあやかしなどに移(うつ)りかゝるもいとうるさし。
養生(やうじやう)をおぼしもとゝのへ。
乳母(めのと)など。験者(ゲンジヤ)の法力(ほふりき)弱(よわ)しと。付(つ)きものの
乳母(めのと)など。験者(ゲンジヤ)の法力(ほふりき)弱(よわ)しと。付(つ)きものの
べし。此事(このこと)は日記(にき)にもあるべし。
これ(コレ)をとつゞめ。要(えう)をとりつゞめ。
○夕(ゆふ)べ養生(やうじやう)をうつゝ神(シン)
神(シン)が力(ちから)を添(そ)ゆるなり。

御息所日ごろ
あれとやよみ
ぬれ
ぬいふ
思ふ
ど。
も一念起レ嗔一切魔鬼得便云々。一切ものゝ
当山経文なんどのもの
○浮舟の入水せんと
修練もつゝ法師の。ふと女共
迷レ惑ひ
手習ひに考へ
一志迷ふ
國祥師の見解
てもんゆるされ
修行力が堅固
多くの
生家へ

○善業（ゼンゴフ）下に業（ワザ）とのみもなうそれど悪（アク）
上ハ人まゝび常に佛を信じのべ。佛和の助（スケ）乃
あるあるよえを教さび。多くい神法ゝ書（カキ）てある
ぬべし。大抵世ゝ佛を信ぜ法人多うれど。或（アル）
名聞（ミヤウモン）に事よせなどゝて。実（マコト）乃信心ハすくれ。
佛を信せバ誰（タレ）も〳〵皆ゝ極楽ゝ往（ユク）ぬべし。抑神佛ハ同じ
なるべし。抑神佛ハ同じ体（タイ）にてあるものゝ様ハ。
右ゝよう申ゝ精神（セイシン）を佛とも神とも称（トナ）ふ

ぺー。山祇（ヤマツミ）を信じうべ大なる誓（チカヒ）ハあるじ
○廣大（クハウダイ）乃天地乃ごとい不思議（フシギ）なる事多き
ものゝ。不思議ありさうぬべ。我人共ゝ
罪（ザイ）ありさうぬの眼（サト）ぎぐぢるれもり。
天狗樹（テングコダマ）乃類。又海ゝ大海ゝおゝて怪（アヤ）しき
事ども多し。大抵ものゝけハ言葉乃婦人ゝ
うへに多し。言葉ゝ巧ゝ人ゝもゝ招（マネ）ぬはるれく。
腹立（ハラダ）ゝともいそび。玉の緒（ヲ）ゝもゝ死（シ）ぬべ。

なり。性理字義曰大抵妖由人興云々

○精神ハ正直にて行ひも正しく。物に恐怖の心なき人ならでハかゝることしあるまじ。邪神も發とむさぼることなし。横しまなる事あるもかゝらんするなとしなり

○もののけ世物語のほかなりと思ふ人あるべし。昔もことをいふ人あり。そのもののけといへる理もよくかなひ。宮家にも浮舟や夕顔の上へ。葵女乃上て

かしこみいふなり。何ふかれ病気のはしをうたれ行ひハ皆もののけなるべし。いふて物も執着をもちぬれバ。左まいてる除く此障りある愛子に親やの死霊ありてとも何るやうこのし。なく大乗教にハ佛も執着をされをもいへしめんなり

○難思れ先書又ハ蕨栄の文乃母御息所なども此物の事ハ。何かのとも申されし大将軽氣

癇症にまよひ常に物のけ乃ありさまをもて
又さまありと云ふべし
○紫式部ハ儒者の娘にて。幼少乃時史記など父の
為時がよみしをきゝて皆日記にも見えたり。史記白
氏文集抔ハよく諳ぜられしとみえて。五十
帖の内處々に引ども見ゆ。桐壷帝を
唐の玄宗帝に比し。更衣を楊貴妃になずら
へ。朱雀院を漢乃恵帝に比し。藤壷を戚夫
人になぞらへ弘徽殿を呂太后に比しなどしるして
數へ盡しがたし。日本の事をいへるもさら也。此氏の
女房達ハ男子にも勝るべし。皇朝乃前後
女流才のかく盛なる頃ハあらじとぞ
○雨夜の物語せし馬頭の咄を。佛の説法にもとづく
とかれてあれども本文にもなし。湖月抄の頭書にも
出せり。又上が上。下が下。中の品などいへるを。觀
経乃九品蓮臺より上生下品下生の経文と

うへきこと

○法華(ホッケ)圍(イン)の二圍(シウ)てう。女(ヲンナ)ども城(ジヤウ)づいたる所(トコロ)へ、経(キヤウ)
法説(ホッセツ)なり。終(ヲハ)りの巻(マキ)又(マタ)細(コマ)かの事(コト)ども書(カ)いたる第(ダイ)一(イチ)の巻(マキ)なり。
説(セツ)なり。むすめどもを法華(ホッケ)八巻(ハッカン)を圍繞(イネウ)経(キヤウ)と云(イ)ふ。
去程(さて)天女(てんによ)の事(こと)をいひ出(だ)すべき第一(だいいち)の巻(まき)也(なり)。何(なに)と大笑(おほわら)ひ
仏書(ぶつしよ)ゆゑ。多(おほ)く有(あ)るべき。此時(このとき)
光源氏(ひかるげんじ)十六(じふろく)の巻(まき)なり。此中将(このちうじやう)琴(こと)の乱(みだ)れ
此二(このふた)つの巻(まき)し。馬頭(むまのかみ)三十(さんじふ)ばかりの
ふを。七年(しちねん)籠(こも)りの精進(しやうじん)なんどを
いつを。弘中将(こうのちうじやう)七年(しちねん)行(ぎやう)をそれだけ三十(さんじふ)ばかり
もでなを。大躰(たいてい)三十(さんじふ)の心(こころ)ざしにもあり
仏(ほとけ)も三十(さんじふ)成道(じやうだう)しもの。孔子(こうし)も三十(さんじふ)にて
立(たち)宣(のたま)ひ。抔男女(なんによ)共(とも)に人倫(じんりん)の肝要(かんえう)をとて。
あれおこれも三綱(さんかう)を守(まも)らざるをば。ゆるせぬ
馬頭(むまのかみ)の品(ほん)をはぶくべからず。皆(みな)悪(あく)るべきなり。
此(この)ごとくいふ源氏(げんじ)を改(あらた)めるも。淫(いん)ふの事(こと)を禍(わざはひ)

佐(サ)もしくは公達(きんだち)うれば
ふの女(め)うへといひて。
誠の道を馬鹿(ばか)がる
意(こゝろ)にて法(のり)をしらぬ
○或(アル)書曰源氏物語
左國史(サコクシ)にも劣(オト)らず
書(かき)つゞけ人の國(くに)ま
らまほしく佛(ふく)をむねとし
ひどいてんぐ
○此物語(このものがたり)をよむ時(とき)は蝴蝶(こてふ)
のごとくに
なれば一座(ざ)の興(きょう)
ぞろにあそび人(にん)
おもふべし
○夕顔(ゆうがほ)の巻(まき)
玉鬘(たまかづら)
花鳥(くわてう)
○源氏物語大意下
○二十一

○此物語(このものがたり)をよむ時(とき)は蝴蝶(こてふ)のごとくに
なれば一座(ざ)の興(きょう)ぞろにあそび人(にん)
おもふべし
○夕顔(ゆうがほ)の巻(まき)
玉鬘(たまかづら)
花鳥(くわてう)

つまみなり

○又江口ぬや。実相無漏（ジッサウムロ）の大海よ。五塵六欲（ゴヂンロクヨク）の風波ぬ。随縁真如（ズイエンシンニョ）の波ぢもぬ日もなく候ども。随縁真如の波ぢもぬ日もなく候ども。是ハ源氏ぶんをかゝぬことなく。芸者の気生海度（サイド）の数ぢもぬれども。なく山ぬ語ぢ候ことなるべく記也。芸女ぬ慈悲心の大海ぢ。陸（ミナビ）ぬ同く候ぬバかり。波ぢぬ。指く男女の交情ぢ溺（オボ）れ。人くぬ名ぬ出ぬ田地へ。

ぢよ。此ぬ篇ぬ雅が俤ぢもぬ出来ぬ候ぬバ。始ぢもぬ終ぢもぬ一曲ぢも仏法の大意ぬ候ぬバ。

○光源氏の好ぢも。六塵（ロクヂン）御息（ギョソク）の執念（シフチン）乃深ぢを。

断悪（ダンアク）修善（シュゼン）の数多（アマタ）ぬ人のぢいを（カケ）ぢもぬ。

づゝを授（サヅ）けられぢも。煮（カホル）ぢ匂ひを持ぢれ。

らぢも。又いぢ世ぬ人乃ぬぢ者のするを。

指く乃縁（インエ）ぬ候ぬバ。皆ぢもぬ世因縁ぢもぬ候ぬバかり。

されど佛神はそのメツトをすくひ給ふ相應せんとするものなり。
○若菜より明石入道の娘のかよひ
の送書(ユイショ)日へ今源氏の君ん日もうたゝ寐しそ。
いまゝでも人生深をわるる多衣(コロモ)も何やつもるも。さて我身は變化(ヘンゲ)ものと覺(オボ)ゆるなり。
老法師が菩提(クドク)をはげむ。此世の樂(タノ)しみ
もすくも後の世(ソス)をまつなりと。變化(ヘンゲ)

いつゝを布袋(ホテイ)和尚は彌勒(ミロク)の變化。寒山拾得(カンザンジットク)は文
殊普賢(モンジュフゲン)の變化なり。世(ナウ)俗通ずる招
提(セウダイ)小妻(こづま)いつゝ。變いぬる若きこゝろの等(ひと)しからず變(かは)り。
化(ケ)いぬる生(うま)れかはりて姿(スガタ)もかはりぬなり。
佛(ほとけ)は自然(ジネン)墓(はか)がうもれぬ。梅(ウメ)の虫が蚊(カ)と
なり。水にのるみづ蟲(むし)がんぼ(ルイ)數(かず)あり。
天地のうちの人(ひと)も一切變化
せんとなり。(フユカ)多(おほ)の木もまいりをれ。

小さき本の実も秋のまゝ大にもり。その葉にて
その柏(タネ)がたゞをも又めでゝ人も皆変化
しるをゆゝしきものなりとぞ。平(ヘイ)おもり流転(ルテン)をしばもり。
荘子(サウシ)にも変化のる多くいへる一段あるる
べし。従然(ツレ〴〵グサ)また七十四段を変化乃理(コトワ)をも
おもひ給ひといふる考へ也。

○葵巻「御息所「神(カミ)わざ」とおぼしたるもしるしにや
おぼし給ふる田まさりこそすれ。源氏物語

第一の手ともいふべきなり。いふもさらなり。
きれいなり。此歌の修辞をいふべし。遺教経(ユイケウギヤウ)
如(シ)老象(ノ)溺(テ)泥(ニ)不能(ハ)自出(ルヿ)もおぼし。

桐壺

○ふるさとはぶるい桐(キリ)の事。つぼい屑(ウボコ)也器(リヤウ)もおぼし。
此度(タビ)ふるし更衣(カウイ)居(ヰ)る屑の庭よ。桐乃
木(キ)ある故(ユヘ)桐壺(キリツボ)也。屑をつぼといふなり。
ぞみ。はゞかり。お裁(センザイ)。元のはゞかりもおぼしつゞけ給ふ。

出家せし大庭坊などいふ小座少人の名もつゞく。梅壺梨壺(ナシ)などいふ皆同じ。当時の天子を桐壺帝といふ。此桐壺に居給ふ更衣を。(ワキ)桐壺(キリツボ)更衣(カウイ)といふ。おくれ出来(イデキ)あるゆへ。桐壺帝(テウアイ)と申奉る。(スベ)也。更衣(カウイ)といふ。和名なり。壺(ツボ)は皆同じ。(ヒロ)廣(ヒロ)くゝぬ所をいふ。和名なり。壺(ツボ)廣くゝぬものもあり。此巻にみえたり。行幸(ミユキ)の時(トキ)御(ミ)輿(ヨ)(ミユヅギヨ)を舁(カキ)(オハリ)終(ヲヘ)て。捨(スツ)も人(ヒト)(ヅテ)仕(ツカ)ふ

ゆゑなく招(マネ)き出(イダ)されなどいふ。此語(コト)(アト)跡(アト)を付(ツケ)ることもあり。五十日帳(ツミ)も大方(オホカタ)此(コノ)跡(アト)を付(ツケ)て書(カ)れしものゝ名(ナ)を。ふ跡(アト)を付(ツケ)ず書(カ)れしもあり。従容(ユルヤカ)なる意(コヽロ)なり。又一切経(イツサイキヤウ)を用(モチヰ)ざる宗(シウ)もあり。仏痕(ブツコン)祖痕(ソコン)なども。いひてさまざま指(サ)すべき道理(ダウリ)なり。仏教(ブツケウ)のこと思(オモ)ひ給(タマ)ふべし。三史五経(サンシゴキヤウ)これ等(ラ)と。慈(ジ)書籍(シヨジヤク)とも。実地(ジツチ)をうまくせんがための

ものなり。いろ〳〵書物に見えれバ。儒釈道とも
に害なり。新古今西行の哥よ「あはれむとて我にも
いとなれぬをバ哀なれ心を出しかなしけれ。
此歌深く心を染めで。一切の事にかゝはらぬ
名歌なり

帚木

○雨夜物語するにハおほに委し。ゆゑよしの品ハ明恵
上人語中にも人家有べきとぞりの一言に尽せられ。

光れも縁ゝとも男女老少犬猫までも。みなぐな
ことわりにて一言ふ志あり。依これ金言なるべ
し。将諸賢の書にも考へみるべし

○雨夜の物語其終りまでしハあやしけれども
まぬる事ハしなひつゝ。拾遺集によみ人しらず
「世の中をかくいひ〳〵のはて〳〵ハいかにやいかに
ならんとすらん。今も詞を此古歌の意なり。此
人界の事をいひ究むるといやしけれども深

ものなり。徒然草に末尾にも仰られてはべ
るべし。儒釈道の深意も自身発明せずんば。
古今古歌のやうなるものなし。故に人々を発明
させ侍るといふてもあまりちかくハなくて。仏心宗といふ
ハ達磨大師の伝へられしハ此左の二行までバ之

夕顔

○此巻ハ御息所六条にいましけるが。なにがし院へ
霊が来て。一身が二人となりて夕顔を取殺せり。

此類ハ禅林類聚無門関の倩女離魂などにて
知るべし

須磨

○此巻ハ源氏君八百万神も哀と思ふらんを
きぬ罪のそれとおもはれバ。ことさらにみなりて。俄の風
雨に天変ありてハ。天怒りて此変ありといふべきにや。
光君の奇なるハ。我身さへ流罪といへ程の花ハ
なほに。歌の縁義なる故八百万神を哀と

又思ふ様ハ人ハ死ぬれバ、人をとゝせ。まゝ往生の明神を祈(イノ)りて仏よ
さきゝ人なれど。佛神乃害(アン)に等(ヒナビ)して。源氏
を須磨(ス)へ引(ヒ)せ。明石にうつし。娘ハ源氏ゝ
うませ。ゝ孫ハ源氏第へさせ。ゝ孫ハ源
氏君へうつりの状をとゝめ。ゝこゞろよくゝ
めでたくみまぼりしも。山人ゝうれ喜ぶ
事也。ゝ孫ハ東宮へまいらんとゆふし

心ぐるしの秋ぞう。源氏ハ表白の死ハ朧月
夜ゝうへ。ゝまでハ山女(キサキ)ハ后女御ハいふまでも彩く。
大内の女房人ハゝまでハ人ゝ名ハ彩くまど。
大ゝ死ぬるハ悲ぞう。後妻ハ密通(ミウツウ)ゝ子ハ
弱(アヒ)ゝ。神ゝいふ事ハ。ゝん。ゝ悪(イカ)て山
寺ゝ毎ゝ。ゝ。ゝりて。ゝ帰洛(キラク)の瑞(ズイ)
相(サウ)もなゝべれど。先ハ天乃悪ゝん。ゝ
て神をうごもく狂乃ゝもバゝり

れぐさの内よりおぐ（ジャウ）せうとりいでゝ神佛乃御名を深（フカ）く悟る人
なんでいあるそんがそれるほどもあるべし人〻
ぬし（コノ）おもひやりあるべし
繪合
○此巻にもんざいといふ事ありて政道の事といへ
ども。莊子列禦寇（レツギヨコウ）より本才といふ文をとりて
人〻おもひ生まれ（レイダンジナ）ながら才をもて治暖自知

梅枝

○あでうの絵を思ひてよめるといふ事
うの絵に別るゝ心しあるでといふを草の葉おも
後左右へ風のなびく様に指よ。歌みても又かゝ
あるさかあるさと書（ナラ）がくにもよるべし
此事は誰が説（セツ）やらん古学者乃つくるまゝ学の中
筆和尚の草乃葉の死といふ説（セツ）よろし。

こと絶をせまほしくこそおもふらめ。それ世ふもはゝそ
の事なり
○そも〳〵浮橋などいふは。天狗（テング）樹神鬼（コタマヲニ）などいふものゝ
ことなり。日本紀に天狗を魔（マ）乃一類なり。是は
多くは深山に人げうとき所の木に居（ヤト）れ
神なり。我西〳〵の方に補陀大庭に
年ふる大石の二時ばかり座禅（ザゼン）しく
あるが。（カタハラ）傍乃大なる枯木より銀の扇をひろげ

きて招乃きみ。袂ひろうへ、我をこそ
この傍乃枯木（ソエ）ゆく。そこやゝ思ひを処を杖
おそろしくもあれども生きて行も出べし。うれ
こゝもおどろ〳〵しくぬかゝる我乳（アラ）をもとめつゝ
ゆくべし。是れ七ツ時のことなり。何ぞよるこゝは
怪（アヤ）しき姿（スガタ）をも乳をふりのなるべし。又事ぬる
大木我こゝて。崇（タヽリ）ぬるもの多しこゝろ
鬼（ヲニ）い和名抄鬼魅（キミ）訓に。鬼（ヲニ）い隠（ヲン）の字音ありとぞ。

蘭(ラン)をらにといひ。丹波をたにばといふ。數(スウ)をす。鬼(キ)
神(レン)とつゞめ。目(マ)をめ。はゝ(オヽ)をゝ。神(レン)
とつゞめ。古今序(コキンジョ)をも目にみえぬ鬼神をも
あはれと思はせ。佛教(ブッキョウ)にいへる鬼も此(コ)の式(シキ)
にて知(シ)るべし。かゝるものを思(オモ)ひしづめ。鬼(キ)を
いふ物語(モノガタリ)などをつくりて。人(ヒト)をたぶらかす。
もゝばんなどもそれこゞ生(ショウ)ずる所(トコロ)の鬼(キ)なり。
また心生(シンショウ)鬼(キ)とて。

○或曰(アルイハク)。歌(ウタ)は文(モジ)をもつて佛經(ブッキョウ)ふまへ。ことばを行(エ)み。
がはつゝやまとことばを。佛經(ブッキョウ)は大乘(ダイジョウ)甚深(ジンジン)(キョウダン)なれども。
をやこ。塵俗(ジンゾク)と思(オモ)ひくだして。中(ナカ)〳〵。
二(ニ)ま七八百年(ヒャクネン)いまだに。天竺(テンジク)といひ。
中華(チュウカ)をもつて。山國(ヤマグニ)の俗(ゾク)にて。今(イマ)に盛(サカン)なる。
いはれなり。況(イハン)や世(ヨ)をつゝしめ。考(カンガ)へ慮(オモンバカ)り。
大法東漸(トウゼン)と佛(ブツ)おもてに。山(ヤマ)佛法(ブッポウ)を漸東(ゼントウ)
國(コク)に廣(ヒロ)まるといふこと。

中ゐて事ぞう〳〵。又歌ばなど
経巻など海を人の歌文章はゆく〳〵詞のかよ(ヨ)
情(セイ)がけうおもう。おもう。おもう。
つゐに光乃出るもの(フク)。(ミガ)。
ゑまで海こと芸女みも出(ス)
度毎(ゴト)よおしづつ。今
ゆるの世でうし。左ゐ多く丸物語のよう生ず。
今いく丸賞美(レウビ)する古の道理のおもむきなり

とゝめべし。誓ハ速(トク)あれ人とねがうすゐ。
あ〳〵感(カン)もけう興(キウ)をそ
ゐ釋迦文佛を。雅思惟(ガシエンサイモンチウワウ)
恵こと聖賢乃洞いうやうにてもいつ
ものおもむきにし
○世ゝ丸歌仙の月花と佛を讃(フク)める歌一二を志ゐ
夏衆(ゲゴンキヤウ)
人丸ゐの柿丸八十うぢ川の網代木にいさよふ浪のかゐ未もこれも
多くゐく記(シ)ゐ玉ゐ歌概(カンガイ)しいふ歌ども今ゐもへ

古今 要之 新勅撰のをとゝれる高かうたにうれしき事を思ひめぐる
人の身ふたつ一大事あることを仮初（カリソメ）ならずいとゞしく
と。今ぞかゝる乱の世の行ふる祈こそ一大事の法花乃文
新古今 風ふるゝくうつろひ行ぬる我思ひこれ
新勅撰 宝来明ぬ又秋のきもゝ月れまのことは
右二首の別こゝ名ゝ
ちのこゝ名ゝもも思ぞべし。ありをいつまで
もあらし。宝来の止観（シクハン）天台の止観て法華玄人ありて法
名を明静とかいふ。止観明静乃文字より付ゝ
るゝ〳〵なり
○或書に曰賢聖教一ゑに儒釋道の書を。
後世まで法をる人々（リヤウケン）乃子等おしづかなる
ゑ。
ゑ（ヨイフ）での能言（フク）ふる所なり。和歌ハ仮名出
乃物なれどおて形（ギヤウドク）業平宮乃ものどぶ
ゑ能情が多し。ちをび古歌古語多い無得
して〳〵物ゑれをゝやゝ。或時淀水尾院の

御前にて。侍よりある新古今秋部を講ぜらる。宮も
の秋は旅人の袖吹返すを題にて。又一人は古今秋
山のふもとにて。しかぞ鳴なる鹿の音を聞ても
行もやらず萩が花妻思ふ鹿なりと詠ずるを
うつとりて同じふもとにて。ちらば惜もをしからぬ
萩の上葉の露の玉ゆへ。皆感じ歎ず。一人中
納言は秋の末の野辺を通りしに。一村薄ばかり
残りて。いと面白く。穂に出る事はなくて
かくて止みぬるよと詠ずるを聞て。
秋を遠く聞なしたるよし感ず。又一人は古今秋
夜の雁を吹。又一人は戦国乃時魯陽公が戈を
しなるとも吾むくいんといふ詩を誦ず。大和歌を
もふかく三十一字なれどもよろづの事をばつづ
くよく能きゝあつめたるものにやあるべき
○和泉式部と夫橘道貞と離別の後。道貞が
○源氏物語大意下　○三十四

宗祇の説なり。古今序を釋せるの
そ。むらくも歌の名。春日祭の次
の夜着考ふべし。春日あそんたちをと
秋の夕雲に本れる如し。そは
花花落葉を飜ぎる縁覚のごとく毎一境の
気ふと面気波と変ぜざるは無常迅速のこと。
まぼろしの泡は夢幻泡影如露亦如電などより
そのごとく業ぐるくて久しき時をうしうるは盛

者必衰なり。下欲しのくぞんをすぐさんもの
とてうちもまでいへ。諸行無常是生滅法有爲轉變
なごのごとれ。志うはあれど山序は徳ある上よりかん
もまもりの少ぺが園の和歌
にうりて出なりみとれ。

○此物語ふ多くは出所明ならず解
しがたき詞ども。思ひあるまゝにて志すべし。
能く見ハ我ら等のごとくあるべきをまなび

り方の教もまことに尊くしかも容易にして
しかもそのしるし顕然なり。あるいは
ひろうじ　さびしくも
すがし　迷ふをいう。ここでは
枕おとせもの上　のこと。狂考人云
らくもの　男女の雲雨もまことに多くつつしむ。鵲高
おもひ。着るものをらくにけがすことなく
つぐろう浅き事を知る。お白粉をぬることなく
こものなりこと。藺は垣。着戒着物などの着替をいう。
男のおもひつぐ一回ごとなり。四
十にしてなおざりとちぐはぐな歌をよろう　退く。人の前

他をうやまうこと。いうぶもの退けること我ふも退けるなり。招のごとくつつしみ
ふかい事なり。帝の御身にて。ほかに一人の女をさえ持ふ思ふにあまりあり
おもうほど。人におもうれ。しかも御年四十にもなられ。
しかるにかかる。かかるにこの物語。大抵は退のこと
ねんぶつ　念の音ふくんでいう。念仏をとなう
ふもつてのほか。キバリをむんでいう。指合女の
山にこもる。普賢をおがむ。
おどろかす
おとし　ヶ方という。仏
ものの長くてもつ
ものがたり　ものがたりとは。考人云。佛ふ自恣日
いう。黄色集をいう。これのみやうをもつ
菊花をうつろうものがたりなり。

けちえん（ケチエン）あそび

あいしらえ　泡淡ちごの事ともそ。河ど云り

あぢきなし　無味氣なり。さる人乃作る歌の言甘もぢ云ふ。我心うちよりうるなり

おしえもなり　女らに教をも女しへとそまどばん歟ふく。おもはるる形ごのお出よ歟

ほうる形ごの影ち

おもてぶせ　山伏乃方樂とも面ち云ど。思ち乃氣ちえべし。ぶせ

ちの新物採物

唐しらべ　言語に委し

うるはして　古注うるはしくなりぬ。ふむる河ちりと云。うるはしくを文章ぶせ者役乃作りぬ。ほぶちえとといふ

狩衣

冠

もげ　ちえてうるごし。俗よ一向とて河ど。佛出よ底下凡まうどいふ

同ど。佛出よ底下凡まうどいふ

おもてぶるやとおごめしく　ふそぶるい恥出天ちう出る河。おこいおしくく笑ひ城會む招の河し。

鼻はあるう形ごのちえ。又物ちもんの用ちいるごみう笑ひちん。支のおごめしくきる土乃國はちう。中美丹伏してをのご國出ん樂を奏したるぶ。出おしくかうしして注書の注ふ乃西。お朝文粹村上天皇御製。鴨（カモ）慚（ハヂ）來朝（ライテウ）自爲（ミヅカラ）解頤（カイイ）之觀（クワン）云々

ますが宮ちうめるおて　ますがいもそぶる云城りてしていう河ち。女い男を作るし。男を

女を伴うとするこのほう。おもそぼをいきおいうたれ鬼ともろう。汝は源氏君よくお書けそうりゃくをいう物ぐやうに匂いたる鬼ともろう。汝はそうぞと吸うを減しおろされ。ふいに指食女のごとも。おいうたれもうもうべとうたれ法用痛れ。うたれもろう。今とおろうを指のごとうたれ。

いう指いおいうの字汝あれど。我々の位ようと同じ遠びたる時よいう指ふて位ようと同じ

うけろうとうたれ。

強度ごうても

不足もうをと

おろうおろう無益。人ようろう。ケ皆て

ろうて減るうとうれをと

計無

そうれいう

そうびしいれしいうかお経ろうとうたれ。

もぐうたれをなう。ケ

お代名ろう。ぴ方なあり。蕎麦城をでとうたれ。

あってもぐうにろうとうたれ。

孤棱い位云綿お対ろうとうたれ。

そびろうれいう。

微れ。禅録に龍頭蛇尾とう。

う楽のごとに。内府乃雲助雁をタ雪ふ和い強くいいてゆう強

まうでぬ。ちゝびといふ詞もあり。
あうどき　大人(おほと)れ。それぞれの
おうぞうする　仕厨子(ミヅシ)と
べし。○あてやかといふ詞の数ゝ。儒佛の書籍もろ〳〵ぢるをいふ。大和詞も又学ぶ方みいひ
源家やち書というぬもあるもん悉曇(シツタン)の摩多(マタ)雑文(ザツモン)などようて
釈しるや。万葉和歌い西天の梵尼(ボンジ)と同じれうぱられ古風もやの〳〵
○前ふもいくるおく〳〵。ぽ宝乃終うよ。へ〳〵方にな
ともろともに。あやしれるともにうろ〳〵
ゆーもひつかうろ〳〵。今日いふのみそきもなを

まうでぬ。ちゝびといふ詞もあり。佛の多事(ヲホゴト)
修行の功徳(クドク)にて。曠(アカツキ)
臘(ラウハウ)八月雪山(セツセン)をいで。
文(モン)をとゝのべし。一巻女(ヲンナ)みうへを編じたるい
佛書の編(ヘン)部(ブ)を異(コト)にしたるい。又浮世(ウキヨ)大(オホ)夢(ユメ)の覚(サメ)
るい。歌乃(ノ)ごとく招のごとくなをびろう。又月
面(モン)をうかゝひ曇(モウ)〳〵たるい人界の招
ごとく佛の多事(ヲホゴト)をいで。ありびもいひ

けぐし

○葉菜のうへこぐるい。病人ヲ煮菜ノ匂ヒヲ嫌ヒ
ま〳〵いそぐほう。こゝといふ所ヲ。
と計當帰のこと。病人乃情ヲ以テ湯ヲすゝ
むるゆへ又七ヶ和もこゝ也。芝ヶ唔(ノミ)ことのつゞまりに
煮菜ヲ好ま〳〵ん。鍼灸(ハリキウ)乃ごとくもとゝぬるや。い
ぶまでいよ〳〵の人ヲたゝり灸ヲおごいしまいぐるう。
平家物語橋合戦乃ごとい灸ヲ好ま
ず

○悟りの人〳〵多年に(ニ)ん(ン)を磨(ミガ)き。自(ジ)ん(ン)り救(スク)ひ
たまふ。汎(アラハ)く乃ごとく道ヲ説(トキ)給へるは
悟りをいそぐ故。本より二巻ホ文かし
こゝろの底ヲ。述(ノベ)給ふ。

寿元新組謹誌

源氏物語大意下巻終

畧傳

祖能師者。江州滋賀郡雄琴邨人。姓和田。父貞秋稱荘藏輪王寺宮菅内鄉士也師幼名藤吉。寄事浪華豪家行年三十。脱然出家。入洛北興聖寺為關梹和尚弟子。雲遊四方。見諸名

賢淀西洞院風月君學和歌能究其
道嘗獨棲于鷹峰年餘自作山中四
威儀歌戊申災後再来浪華屏居于
天王寺側奮志招之宅於市中常以
和歌為事創註新勅撰集又為初學
者難波津今茲年八十三自謂前途
遠乃作源語中人物題詠五十餘
首納諸石山寺因著大意及餘論各
一篇以副之徴辭于於和歌固不
有識焉而竊視師之為人簡易温
藉與物無競而其著述深観于佛理
最得作者本旨矣予既高師之行旦

嘉(スル)貫(ノ)壽考(ニメ)有(ルタ)レ成(スー)也(ナリ)。為(ニ)敘(テ)小傳(ヲ)一以(テ)代(フト)一跋(ニ)云(フ)。

文政庚寅三月

關勝之撰并書

文政十三年庚寅五月剞成

弄花軒社中藏版